『比較日本文化学研究』第 13 号（2020）

論　文

渋沢栄一の中国訪問をめぐる議論

―― 中国の新聞記事の分析を中心に ――

左　　曼麗

上海立信会計金融学院講師・広島大学大学院文学研究科博士課程後期

Shibusawa Eiichi's Visit to China: An Analysis of Chinese Newspaper Articles

ZUO Manli

Abstract: Japanese industrialist Shibusawa Eiichi's visit to China in 1914, attracted numerous attentions within Japan and overseas. The purpose of this paper is to discuss the Chinese media's perception of Shibusawa Eiichi and how his speeches during the China visit were comprehended, by analyzing relevant newspaper articles. Shortly before the outbreak of World War I, China was cautious about Japan and was distrustful about Shibusawa Eiichi's visit to China. At the same time, due to Shibusawa Eiichi's profound understanding of Chinese history, Chinese culture and Confucianism, his visit was highly expected. Such complicated feelings were included in Chinese newspaper articles about Shibusawa Eiichi's China visit. This paper is not only an indispensable part of the study of "Shibusawa Eiichi and China", but can also reflect the Chinese attitude toward Japan at the beginning of 20C to some extent.

Key words: Shibusawa Eiichi; China visit; Chinese newspapers articles; perception of Japan

1. はじめに

渋沢栄一（1840 － 1931 年）は、日本社会が大きく変動を遂げた幕末から昭和初期にかけて活躍していた人物で、「日本近代資本主義経済の大指導者」と呼ばれていた[1]。19 世紀末から 20 世紀初期にかけて日本は中国大陸への進出を目指し、政界、財界そして大陸浪人が各自のルートで中国と接点を持つようになった。渋沢栄一は対中進出の財界人の中でリーダーとしての存在で[2]、当時の日中関係を論じるときにも無視できない人物である。彼は三度にわたり中国を訪れた。一、二回目の訪中[3]は上海での短期滞在で、三回目は

30 日余りの長い時間をかけて、南の上海から北の大連まで参観・訪問した。またその三回目の訪中は第一次世界大戦が勃発する直前の 1914 年 5 月であり、日本国内から海外まで注目された。本稿は第三回の中国訪問をめぐって議論を展開する。

渋沢栄一と中国に関する研究は 1900 年代から始まった。1914 年の中国訪問についての先行研究もすでに存在し、李廷江[4]、片桐庸夫[5]、金東[6]、周見[7] 等の研究があげられる。その中、金東氏は渋沢の利権に対する態度と対中実業思想について検討した。渋沢の利権に対する認識は「日本の経済利益を擁護しさらに開拓するという考えに基づいた」、「政治的な利権を排斥し、双方（日本と中国）に有利な利権を取り入れた」と論じた。以上の研究で用いられた史料は多くが日本側の『渋沢伝記資料』に限られており、「中国マスメディアから見る渋沢」に関する研究はほとんどなされていないのが実情である。一方、19 世紀末頃創刊された新聞雑誌の対日観についての研究も少なくない。これらの研究は新聞雑誌の日本に関する報道を分析対象とし、対日観の形成と認識を考察した[8]。だが、中国の対日観に関する研究はほとんど日本全体に対する印象を論じてはいるが、対中経済進出に重要な役割を果たした日本財界に対して、中国マスメディアはどんな認識を共有していたのか、検討されていなかった。

本稿の目的は、渋沢の訪中に関する中国の新聞記事を対象に、当時対日観の全体像の中渋沢栄一のような財界人はどのように捉えられているのか、渋沢の訪中目的・「利権」に対する言論はどのように中国のマスメディアに理解されているのかについて、関連の記事を取り上げ分析することにより、明らかにすることである。それは、渋沢と中国についての研究の一部になるだけでなく、そこには当時の中国人の対日姿勢も反映されていると思われる。

2. 訪中の背景及び旅程

まず、渋沢の中国訪問のきっかけとなった中国興業株式会社の設立から述べていく。1913 年 2 月孫文が来日し、「（辛亥）革命後の支那は実業を以て立たねばならない。それで袁（世凱）には政治をやらせ、自分は実業をやる」という意志を伝えた[9]。後日渋沢は日中関係者を集め、三回の発起人会を通じ、合弁会社の方針概要、発起人選、会社の資本金・定款等を定め、中国興業株式会社を設立した。だが、その直後、中国国内では第二革命より政局は袁世

凱優位に推移し、1913年10月袁は正式に大総統に就任した。その後、孫文の勢力は凋落したことにより、中国興業の事業展開は躓いた。

1913年11月政権を握った袁世凱は中日公使汪大燮を通じ、渋沢を北京に招請した。理由としては「(中国興業) は中国政府の実業開発機関とし、兼て両国親善の源泉とし度く、其の生みの親たる発起人にして且つ現に首席相談役たる『渋沢男爵と面会し親しく意見の交換を行ひたきも、躬は現に大総統の要職に在りて外遊至難なれば願くは渋沢男爵に於て観光旁々来燕あらは幸甚なり』」[10] ということである。それに対して渋沢は孔子の故郷曲阜の聖廟参詣が多年の宿願であったこともあって、招請に応ずることにした。

しかし、当時はすでに冬に入り、高齢且つ病み上がりということで、渋沢はすぐに中国訪問を実現しなかった。従って、1913年11月副総裁の倉知を代理として派遣し、自分は翌春中国を訪問することにした。翌1914年5月、渋沢は延期していた中国訪問の途についた。

渋沢一行は5月6日上海に着き、杭州、蘇州、南京、漢口、武漢、北京、天津、旅順を歴訪し、6月2日大連から郵船に乗って、帰国した。

3. 渋沢の訪中に対する認識

本稿が主として取り上げた史料は史料集『渋沢栄一と中国：一九一四年の中国訪問』[11] で、中には11社の訪中記事と関連報道・評論が集められている。史料集の中での、渋沢の中国訪問に関する報道件数は以下の通りである。上海『申報』(27件)、上海『時報』(19件)、上海『神州日報』(10件)、北京『順天時報』(20件) 大連『満州日日新聞』(23件)。その中、大連『満州日日新聞』は日本語の新聞で、読者層は当時の在満日本人であるため、また別稿で論じることにする。『新聞報』、『時事新報』『大公報』、『国民公報』、『河南日報』、『盛京時報』六社の関連記事は少ない上、内容が訪中の旅程報道にとどまったから、本稿の検討には入れないことにした。なお、史料集に取り上げたのは5月以降渋沢が中国に着いた後の記事で、筆者は訪中前の3月、4月の関連記事も調べた。史料集に収録された記事は日本語版の訳文を使い、収録されていない記事は筆者が訳出した。

新聞記事を分析する前に、本稿の検討に入れた四つの新聞社の概況について説明しておく。『申報』は1872年に「戸を出でずして天下を知る」[12] という理念で創刊され、20世紀初期頃には中国全国の重要都市ばかりでなく、海外

でも売れるようになった。1912 年から史量才が経営権を引き継ぎ、新聞業の改革に力を入れ、当時大きな影響力を持っていた新聞社となった[13]。『時報』は 1904 年上海で狄葆賢により創刊され、「民族工商業を発展させる」というスローガンを掲げていた。辛亥革命後、『時報』は「文人論政」の理念を抱え、新聞業界、教育・文化芸術における改革を唱え、中国知識人の中で高く評価されていた[14]。『神州日報』は 1907 年上海で創刊され、創刊者于右任は「人々の民族意識をかき立てる」と呼び掛け、発刊詞には「神州社会主義」「神州国家主義」等の概念が提出された[15]。また清末の時局はきわめて重大の時期に、「(『神州日報』は) 強権を恐れず、革命を主張し、民衆の支持を得て、販売部数が大きく増加し[16]」、影響力が一気に高まっていた。『順天時報』は 1901 年日本人中島真雄が北京で創刊した中国語新聞紙であり、「中国国内外の通信社から素材を手に入れ、中国人が翻訳と編集などの作業をし、日本人の審査を通じ、採用を決める」という流れで運営されていた[17]。当時中国北方の主流マスメディアとして認識され、日本の政策が反映されていたと考えられる。

3.1 訪中目的について

1914 年実業家渋沢栄一の中国訪問は日中のみにとどまらず、海外まで多くの注目を浴びた。海外メディアは彼の訪中目的が「利権獲得」と「中国における事業を開拓すること」などにあると推測した。それに対して、渋沢は強く否定した。

> *「(訪中) 並非有何野心之欲望，第一目的是在遊覧風景以取樂。……唯彼尚擬與在中國之與中日興業公司有關系者數人有所商議，足為彼此行之第二目的。」*
> *訳文「野心、欲望というものは何もない。第一の目的は遊覧シテ風景を楽しむことである。……ただ、中国で、中日実業会社に関係する数人との間で協議を行う予定で、これも今回の訪中の第二の目的である。」*
> *『神州日報』 1914 年 5 月 8 日「澀澤男爵在滬之談論」*

また、渋沢は訪中期間に「(訪中は) 利権獲得ではない、政治とは全く関係ない」と何度も繰り返し強調したが、先行研究より「訪中は政治と無関係とはいえない」といった一致した結論に達した。その中李廷江は中国興業公司の設立・改組、渋沢の訪中について検討し、渋沢の訪中は対中経済進出を強

化したいという財界の要求を反映したものであると結論をづけた。片桐庸夫は渋沢の中国行の成因となった中国興業公司について、「政治的な色彩が濃い」、「国策会社らしさを示す一面でもある」と論じた。周見は、渋沢の訪中目的について、「日本の対中経済拡張に必要な政治と社会環境を作り出し、過去の武力で威嚇し強権を振るうような日本の対中外交における悪いイメージを改善しようとした」と指摘した。

それに対して、当時中国のマスメディアは渋沢の訪中目的をどのように捉えているのか、どんな態度を持っているのか、この節で論じてみたいと思う。

渋沢訪中前の1914年3月に、以下のような新聞記事があった。

「聞澀澤榮一男爵之來京半為銅官山礦産讓與權事盍1912年柏文蔚在皖督任時曾借七厘息之日款若幹以該礦為抵押品現信日人欲攘如所謂漢冶萍公司之權雲」

拙訳「渋沢栄一男爵の来（北）京の目的の一つは銅官山の譲予権にあると伺った。1912年柏文蔚は皖の都督に在任する時、この鉱山を担保にとり、日本から利息7厘の借款をした。現在日本側は漢冶萍の権利を奪うとろうとしていると思う。」

『時報』 1914年3月22日

［現悉日本財政家澀澤榮一男爵之來華實欲代表中國興業公司開議推廣江西讓與權事宜雲雲。］

拙訳「日本の財政家である渋沢栄一男爵は中国興業会社の代表とし、江西譲予権について検討するため、中国を訪問する予定。」

『申報』 1914年3月26日

「中日興業公司與漢冶萍暗中有連帶關系，澀澤氏不日來京聞於要求立案外尚有別想要求，最著者則為欲得長江流域之特別權利。」

拙訳「中日興業公司は漢冶萍と暗闇に関わっている。渋沢は近いうちに北京に来る。立案以外には他の要請がある。その第一は長江流域の特別の権利を求めることである。」

『申報』 1914年3月26日「對於漢冶萍借款之各方態度」

まず、上記の三つの記事が言及した漢冶萍公司について説明する。漢冶萍公司[18]の日中合弁化問題[19]は、1911年の10月に発生した武昌蜂起[20]の直後に提起された[21]。日中合弁に反対するため、大学生のデモが行われた。中国マスメディアも大きく関心を引き、1911年11月から1912年3月までわずか5

ヶ月の間、『申報』、『時報』には漢冶萍公司の日中合弁化問題に関わる報道・評論が60件以上載せられた[22]。中には、反対の声が圧倒的で、日本が中国鉄鉱の所有権を独占しようとしているから、警戒すべきだと呼び掛けた。中国全国の猛反対より、1912年3月22日漢冶萍公司は特別株主総会を開き、株主の投票より、日中合弁事業を中止した。

翌年の1913年3月株主総会において盛宣懐の総理復帰が決定され、日中合弁化を進展させる一面を持ち合わせていた。1913年から1914年にかけて、日本の正金銀行と漢冶萍の間借款契約が締結された。それに対して、中国政府は日本からの巨額借款に反発した。またイギリスは長江流域にある鉄道利権を守ることを目標に、漢冶萍公司への借款などに非難を加えていた[23]。

このような状況の中、海外メディア（特にイギリスの方）は渋沢の訪中が漢冶萍公司の利権獲得と関わっていると呼び掛け、中国人の注意を喚起しようとした。よって、日中関係の現状及び海外メディア報道の影響より、訪中前中国マスメディアは渋沢の訪中に対して警戒姿勢を呈した。

一方、訪中期間渋沢は上海実業協会宴会、漢口日本人倶楽部宴会等の場所で、幼いごろから中国の経書を読んだ経験を述べ、孔子への敬意を伝えた。

「(渋沢曰）余之遊華，盍了久蓄之願。余自少年讀中國經典時即心向往之，且余向尊孔學。……」
訳文「訪中はかねてからの願いであり、幼いころに中国の経書を読んだ時からここにあこがれてきた。また、私は孔子を尊敬しており……」

『申報』 1914年5月6日

「予當青年時代，即涉獵漢籍，研究漢學，而於孔孟之學尤所註意。」
訳文「青年時代から漢籍を渉猟し、漢字を研究し、とりわけ孔孟の学を大切にしてきた。」

『神州日報』 1914年5月8日

その上、訪中の目的は利権獲得ではない、単なる観光と経済提携であると強調した。渋沢は訪中期間、国民外交の代表者とし、日中両国が「同種同文」、「唇歯輔車」であると打ち出し、相互提携や友好発展の姿勢を見せようと努めていた。以上の行動の効果が現わられ、以下の記事も見られた。

「澀澤此來專為已經成立之興業公司，頗不以急急要求利權魏然。蓋日人中有先正典型者。」

訳文「渋沢氏の今回の訪中はすでに成立した中国興業公司の為であって、焦って利権を求めようとすることは実に間違ったことだとの考えである。日本人の中でも先正典型的な人物である。」

『申報』 1914年5月25日

渋沢は日本人の中で「先正典型」の人物であると述べ、彼への好意を示した。また渋沢は各地に到着した時、中国の政界だけでなく、中国の実業家から熱烈な歓迎を受けた[24]。特に上海に着く時、上海総商会、漢冶萍公司、中日実業公司がパーティーを主催した。パーティーに中国側は136人が参加され、その中多数は実業家である。渋沢は日本実業界の重鎮であり、中国実業家は彼との交流を期待していたと言えるだろう。

1914年中国内部の政争も日中関係も非常に複雑であったため、実業家である渋沢は訪中期間、講演する時やインタビューを受けるたび、慎重に言葉を選び、政治、外交といった敏感な問題にはできるだけ触れないことにした。それに対して、中国マスメディア『申報』、『神州日報』などは警戒と好感といった矛盾的な態度を持っていることが分かった。第一次大戦が勃発直前、日本に警戒心を抱き、不信感を持ちながらも、日中両国の実業界における交流・提携を求める渋沢に対して、歓迎する態度を保っていたことが中国のマスメディアの記事から読み取れる。

3.2　渋沢に対する印象・評価

日本資本主義の建設者と称された渋沢栄一は当時の中国マスメディアにどのように捉えられているのか、この節で論じてみたいと思う。

渋沢はいつから中国マスメディアに注目されたのかを究明するため、本稿ではまず出版期間が最も長い中国語新聞―上海『申報』を対象として調べた。渋沢の関連記事[25]のデータから見ると、『申報』創刊の1978年から1913年までの36年間、渋沢に関する記事は18件しかなかった。その上、ほとんどは名前が出たのみだった。渋沢が国際事業に関心を持ち始めたのは19世紀末頃で、本稿の「はじめに」でも述べたように、1895年から1911年までの間に、14社以上の中国に関わる企業と組織の設立と運営に携わっていたが、あまり報道されていなかった。その後、中国訪問より、渋沢に関する記事が一気に多くなり、1914年の一年間で関連記事が45件に上った。中国訪問をきっかけに、渋沢は中国マスメディア『申報』に注目され始めたと思えるだろう。

さらに、渋沢についての記事には、彼の実業事績、経済思想についての紹介は見られなかった。日清・日露戦争後、中国は維新後の日本をあらためて見直し、日本へ留学生派遣し、日本の文献を翻訳し、日本の歩んだ道に学ぼうとしていたが、渋沢をはじめとする日本財界への研究はまだ始まっていないきらいがある。

一方、在中の日本マスメディア『順天時報』は多くの紙面を使い、日本の実業家である渋沢について詳しく紹介した。まず、北京『順天時報』の時事要報「澀澤男爵傳略」には、彼の経歴、人格、実業における地位、取り掛かった事業について論じた上、以下のように述べた。

「(略) 且男爵自從事實業以來，勛也業與聲望日隆，故每逢內閣更叠之期，人每推轂使充大藏大臣之榮職者，前後已不知凡幾。(略) 宜夫望逾泰鬥，傾倒我實業界中。凡一言一行，均能左右政界。」
訳文「男爵は実業に従事するようになって以来、優れた功績をあげ、声望も日増しに高まり、内閣が鋼鉄されるたびに、大蔵大臣の栄誉ある職に推されることが何度もあった。(略) 男爵は泰然として、実業界に心を傾けている。この一言一行はいずれも政界を左右し得るもの」
『順天時報』 1914 年 5 月 19 日 「澀澤男爵傳略」

『順天時報』は渋沢を惜しげもなく称賛し、「凡一言一行，均能左右政界」(渋沢の一言一行は日本の政界を左右することができる) と述べ、彼の日本政商界におけるかけがえのない地位を強調した。渋沢は1873年に上司の井上馨とともに大蔵省を退官し、「実業界の開拓は余が天の使命」と信じて実業家活動を始めった。実業へ転身後も政府側と緊密な関係を持ち続けたのは否定できない事実である。

また、同紙の論説「歓迎澁澤男爵」の中、以下のように述べた。

「且夫中國朝野人士，非日言振興實業耶？(略) 盍中國數千年來概行專制政治，一般人之眼光，莫不視官吏為貴，實業為卑，(略) 設此風不改，吾恐實業終無振興之時。今澀澤男爵為投身實業起見，舍其高官顯爵如棄敝履，數十年來專心實業壹途，東西奔走，至老不倦，中國愛國之士正宜仿其出處，用以為師。又男爵於中國經濟問題研究有素，如統壹幣制，整理紙幣，開拓礦山諸事業，倘能就正於男爵，獲益當亦匪淺。由斯以談，中國士夫對於男爵之來遊，已應額手相慶。」
訳文「中国の朝野の人士は、実業の振興を言わぬ日はない。(略) 中国では数千年にわたって専制政治が行われてきた。そのために、一般の人々の目

の中では、官吏こそ尊いものであって、実業は卑しいものと考えられている。（略）この風潮が改まらない限り、実業が振興することはないと私は恐れる。渋沢男爵は、実業界に身を投じたわけだが、高官顕爵をきっぱりと捨て、数十年実業に一途に専心して、東奔西走し、老いてもなおあきない。中国の愛国の士はその出処進退に学び、之を師をすべきである。また、男爵は中国の経済問題についてよく研究している。たとえば、統一貨幣制度、紙幣整理、鉱山開拓の諸事業についても男爵の教えをおうことができれば、得るものは多きに違いない。したがって、中国人は男爵の来訪を心から歓迎すべきである。」

『順天時報』 1914 年 5 月 19 日「歓迎澁澤男爵」

以上の記事は中国実業界の問題を指摘し、官尊民卑の風潮が改まらない限り、中国の実業を振興させることはできないと述べた。『順天時報』は中国の愛国人士が渋沢の出処進退に学び、中国の経済問題についても渋沢から指導を受けるべきだと高みから見下ろす視線で語った。当紙は日本外務省の管轄に入っているため[26]、社論・論説には日本政府の対中政策を一定程度反映していたと考えられる。また中国の実業界に対して、渋沢も同じような態度を示した[27]。訪中初期、渋沢は「中国の実業家と交流したい」意向をマスメディアに伝えた[28]。訪中期間渋沢は実際に中国の実業家とどのぐらい交流ができたか、それを究明するために、筆者は渋沢の日記[29]に基づき訪中旅程を整理した。管見の限り、渋沢は中国政界の人物、在中の日本政商界人物との会見が多く、中国実業家との交流はパーティー、講演などの場所にとどまり、実質的な交流はほぼなかったと考えられる。

以上の分析により、1914 年以前、渋沢は中国マスメディアに注目されていなかったことが分かった。訪中の関連記事に彼の事績、経済思想についての紹介もほぼ見られなかった。一方、在中の日本マスメディア『順天時報』は渋沢の経歴、実績を紹介したうえ、彼のことを惜しげもなく称賛した。渋沢は単純の実業家ではなく、政治と深く関わった有力者として認識され、「中国実業界への指導」「大陸経営・経済発展への指教」等が求められた。『順天時報』は渋沢の訪中に大きく期待していたといってもいいだろう。

3.3　渋沢が理解した「利権」について

渋沢の「利権」論述については、金東氏は、渋沢が語った「利権」とは「日本の経済利益を擁護しさらに開拓するという考えに基づいた」、「政治的な利

権を排斥し、双方（日本と中国）に有利な利権を取り入れた」と論じた。それに対して、中国のマスメディアはどのように捉えているのか、この節で論じてみたい。

まず、渋沢は上海に着いた直後、次のような発言があった。

「欲使一國發達，必須有經濟上之三種要素，即富源，資本與從事者之智慧經驗是也。中國有亟應發達之富源甚多，英國既有資本，則日本自當以關於中國之智識供給英人作一致之進行。」
訳文「一国が発展するためには経済上に三つの要素が必要だ。すなわち、資源、資本、従事者の知識と経験である。中国は極めて豊かな資源を多く持つ。イギリスは資本を持つ。そして日本は中国に関する知識を持ち、それをイギリスに提供して、一致した行動を採らねばならない」
『神州日報』 1914年5月8日 「渋沢男爵の上海における談論」

中国を発展させるために、資本を持つイギリス、資源を持つ中国、知識と経験を持つ日本といった三者の協力が必要であると主張した。また日本とイギリスとの利権衝突について、このように述べた。

「顧余常聞日本權利與英國權利沖突之説，深為不快，次説緣何發生，余殊不解。……余確知英國在揚子江流域所占勢力之重要，唯聯盟兩國當互相讓步，不如是，則難免權利之沖突。」
訳文「日本の権利とイギリスの権利が衝突するとの説を聞いた時には非常に不快であった。そうした考えがどのようにして生じたのか、実に理解に苦しむ。……イギリスが揚子江流域で占める勢力の重要性を知っているが、同盟両国はお互いに譲歩しあうべきだ。さもなければ、権利の衝突は避けがたい。」
『神州日報』 1914年5月8日 「渋沢男爵の上海における談論」

中国における日本とイギリスの権利について議論し、両国の間は衝突を避け、お互いに譲歩しあうべきであると述べた。以上の発言は、本人が述べた「訪中目的は単なる旅行、利権獲得ではない」（前述した「澀澤男爵在滬之談論」）とは矛盾しているではないかと思われる。また5月20日の夜渋沢は北京在住日本人が設けた歓迎会で「利権」について解釈をつけた。

「略謂經濟之道以利己利他為用，仁愛為體，斷非戰爭以較勝負，搏噬以事攘奪之可比也。……獲一利權，己可得利，人亦可以受益，則彼此利益各不相虧，決非戰爭攘奪損他利己之所可仿佛萬一者也。」
訳文「経済の道は利己であるとともに利他でなければならず、仁愛を体と

し、断じて戦争により勝敗を争い、争いにより奪い合いをするものであってはならない。……おのれも利益を得、他者もまた利益を受けることができる。この場合、お互いの利益は矛盾するものではない。決して戦争が他を損ねて己の利するようなものではない。」

『申報』 1914年5月27日 「北京の日本人居留民による歓迎」

渋沢は「利権」について説明し、経済における利権は「利己」と「利他」のウィン－ウィン関係である。ここで渋沢が述べた「利己」の「己」は日本を指し、「利他」の「他」は中国を指している。戦争のように勝敗を争う必要がなく、日中両国は「平和の商戦」を展開すべきであると主張した。また渋沢はほかの講演の中でも「利権」についての説明した[30]。金東氏は「彼のこのような解釈についての動機は中国側の懸念を取り除くことであった。」[31]と評価したが、この解釈は実際に効果を果たしたのか。次の記事より、中国側の反応の一側面が見られる。

「澀澤氏謂：經濟之道，以利己利他為用，……即以日人之經營南滿言，利我中國何在也？……然則澀澤氏之言，亦僅理想之言耳。欲世界道德進歩，而如氏所言者，不知將再閲幾十世紀也哉」

訳文「渋沢氏は、経済の道は利己であるとともに利他でばければならず、……日本人による南満州の経営を例に取ると、どこが中国を利しているか。……渋沢氏の言葉はまた、理想の言葉にすぎない。世界の道徳の進歩を願うが、氏が言うようになるのは、あと何十世紀先のことになるだろうか。」

『申報』 1914年5月27日　雑評「渋沢氏の経済道徳談」

この『申報』の雑評には、「日本人による南満州の経営を例に取ると、どこが中国を利しているか」と疑問を打ち出し、渋沢の「利己」「利他」はあくまでも理想にすぎないと述べた。渋沢が繰り返し論じた「経済の道」は共感を覚えられず、理解されていなかった。金東氏は「渋沢が語った利権は二重基準を採っているという疑いがある」[32]と語ったが、恐らく『申報』の雑評を書いた作者もそのように考えていたのだろう。清末から民国初期にかけて、中国人の対日観は多元的で、親しみと恨み、敬慕と警戒、といった複雑な感情を抱えている[33]。当時中国の新聞記事の中には、「渋沢が語った経済の道はあくまでも理想論」、「中国の立場から考えたものではない」と主張する記事があり、日本の経済進出を警戒すべきであるというメッセージを民衆に伝えようとした姿勢が見られた。

3.4 渋沢と日本政界の関係

李廷江の研究より、「中国興業株式会社は計画期からすでに日本政府の基本的な考えをよく示していた」ことが明らかになった[34]。また、彼は「日本政府と財界は、渋沢の訪中が日中両国の経済協力を発展させ、日中双方の経済関係を発展させるための重要な第一歩であると考えていた」と論じた[35]。当時中国マスメディアは渋沢と日本政府の関係をどのように考えていたのか、この節で論じたいと思う。

李廷江は「渋沢栄一の中国訪問は、新内閣の対中政策を推進する最も重要な民間外交として位置づけられたものである」と論じたように、日本政界は渋沢の中国訪問に大きく関心を寄せた。訪中後、大隈重信は渋沢の訪中について「先頃渋沢ノ漫遊、功ハナイデハナイガ彼ノ中日銀行問題ノヨウニ特権ノ問題、アレハ孫ト始メテ手ヲ付ケ、今ハ袁ト相談ノ事ト云フ」と評価した。当時の中国マスメディアも日本政府が渋沢の訪中を重視したことを気づいただろうか、『神州日報』より、次の記事があった。

「(澀澤) 男爵與東京官場有密切關系，且極為日本經濟，商業兩界人士所推崇，故彼昨日所發言於英日兩國調和揚子江方面權利之言，有非常之趣味。彼之言論雖發於現任日本内閣總理大隈伯爵表示意見之後，而兩人詞調頗有相似之處。故聽澀澤男爵之言，更足以瞭然於日本所抱對於發達中國之意見，與該國將來之舉動如何也。」

訳文「男爵は東京に官界と密接な関係を持つ上に、日本の経済界、商業界の人々から非常に尊敬されているため、日英両国の間の揚子江方面の権利の調和について昨日の渋沢男爵の発言は非常に興味深いものであった。その発言は、現在の日本の内閣総理大臣大隈伯爵の意見表明の後になされたものであったが、二人の発言内容は非常に似た部分がある。そのため、渋沢男爵の言葉を聞くと、中国の発展について日本が抱く意見、日本の将来の動きがどのようなものとなるかについてより十分に理解することができる。」

『神州日報』 1914年5月8日 「渋沢男爵の上海における談論」

また翌日の社論には、こうのように論じた。

「日本大名鼎鼎之澀澤氏亦已抵滬，其對某西報記者之語，亦與大隈同一聲調，此尤可註意者也。循是而察日本新政府之用意，固不外一面用懷柔手段交歡中國，乘機謀為實業上之擴張，以冀多獲平和中所得之權利，而一面則以此政策消弭英日二國在華權利競爭之沖突。」

訳文「日本でその名の知られた渋沢氏も上海に到着したが、彼も西洋のある新聞の記者に対して大隈と同じことを言っていたというからとりわけ注目すべきである。そこから、日本の新政府の姿勢が知れる。つまり、表面的には懐柔の手段を通して中国と交歓しつつ、機に乗じて実業上の拡張を図り、平和のうちに多くの権利を得ようとする。また一方では、この政策により日英両国の中国における権利競争の衝突をなくそうという考えである。」

『神州日報』 1914 年 5 月 9 日 「日本對華政策演變之可註意（一）」

以上の二つの記事は、渋沢の発言が大隈と似たような態度を持っていたことを強調し、渋沢の対中態度により日本新政府の対中姿勢を判明することができると論じた。その時期中国マスメディアは日本の対中政策を重視し、新政府の内閣総理大臣である大隈重信の外交政策に関心を持っていた。1914 年 6 月 13 日上海『申報』は「日本の大隈首相の外交政策」をテーマにして、『新日本』雑誌に掲載された大隈重信の外交政策の大略を転載した。上海『東方雑誌』も 1914 年第 10 巻第 12 号に章錫琛が訳した「日本大隈伯爵之東方平和論」を掲載した。当時の中国が列強に侵略される焦りの中、アジア隣国日本の対中態度に注目を注いだことが分かった。こうした中、仕官時代から大隈重信と知り合った渋沢は単なる実業家ではなく、日本の対中政策の代弁者として扱われた。『神州日報』は日本側の「実業拡張を図り、多くの利権を得ようとした」懐柔的な対中政策に、留意すべきであると呼び掛けていた。日清戦争から 1914 年まで 20 年近くの日本の対中進出によって、中国の日本に対する不信感は変えられない事態になったといえるだろう。

4. 終わりに

本稿は渋沢の中国訪問に関する中国の新聞記事を取り上げ、「渋沢の訪中目的」、「渋沢に対する印象・評価」、「渋沢の『利権』に対する理解」、「渋沢と日本政界の関係」の四点をめぐって分析をした。本稿で明らかにしたことは、以下のようにまとめることができる。

日中関係がだんだんと緊張化していく中、袁世凱を始めとする北方派の疑いを軽減させ、誤解を解けるための中国訪問について、日本の『時事新報』は「男（渋沢）の来中は日支実業関係の上に絶大の効果を現し、北方実業家の誤解も解け、一般の気受良好なりと」[36] と高く評価したが、中国マスメディ

アは違う態度を示していた。一部の中国の新聞記事は、渋沢の訪中目的が「利権獲得」であり、彼が語った「経済の道」も理想論に過ぎないと主張した。また渋沢を日本の対中政策の代弁者として扱い、日本の経済進出を警戒すべきであるというメッセージを民衆に伝えようとした姿勢が見られた。一方、渋沢が示した漢学の素質と中国儒教文化・孔子への関心は好感を持たれたゆえに、中国実業家は渋沢の来中を熱烈に歓迎し、『申報』、『神州日報』の記事では渋沢の訪中に期待の姿勢を示していた。それ以外に、在中の日本マスメディア『順天時報』は渋沢のことを惜しげもなく称賛し、彼に「中国実業界への指導」「大陸経営・経済発展への指教」といったことを求めていた。第一世界大戦の勃発直前、日本に警戒心を抱き、不信感を持ちながらも、日中両国の実業界における交流・提携を求める渋沢に対して、歓迎する態度を保っていたことが中国の新聞記事から読み取れる。日本の利権獲得への警戒、渋沢と日本政界との関わりへの懸念、渋沢への好感、渋沢訪中への期待、そういった複雑な感情を訪中に関する中国の新聞記事から伺い知ることができ、そこには当時の中国の対日観をも反映されていると思われる。

※本稿は、2018 年度上海における大学の若手教師助成プログラム（上海高校青年教师培养资助计划）による成果の一部である。

注

[1] 土屋喬雄（1989） p5

[2] 渋沢は 1895 年から 1911 年までの間に、14 社以上の中国に関わる企業と組織の設立と運営に携わっていた。

[3] 一回目は 1867 年で、27 歳の渋沢栄一が一橋家の家臣として、徳川慶喜の弟昭武に随行しパリで開かれた万博を参加に行ったとき、短時間上海に滞在した。二回目の訪中は 1877 年で、日本政府は清国から借款を要請された。渋沢栄一と益田孝は借款の交渉を委任され、1 月 26 日に上海に赴いた。

[4] 李廷江（2003）『日本財界と近代中国―辛亥革命を中心に―』 御茶の水書房

[5] 片桐庸夫（2002）「渋沢栄一と中国―その対中姿勢として（一）」渋沢研究　第 15 号 p3-26

[6] 金東（2010）「渋沢栄一の対中実業思想と利権問題について―1914 年の訪中を中心に―」渋沢研究第 22 号　p 27-37

[7] 周見著、西川博史訳（2016）『渋沢栄一と近代中国』現代史料出版

[8] その中、鄭翔貴（2003）、程広媛（2009）、景麗（2018）があげられる。

[9]『渋沢栄一伝記資料』(1944) 第54巻　p519

[10]『渋沢栄一伝記資料』(1944) 第54巻　p548

[11] 田彤編、于臣訳 (2016)『渋沢栄一と中国：一九一四年の中国訪問』不二出版 (日本語訳版)

田彤 (2013)『1914年渋沢栄一中国行』華中師範大学出版社

[12] 原文「人不出戸庭而能知天下之事」

[13]『上海新聞志』p103-105

[14]『上海新聞志』p130

[15]『上海新聞志』p131-132

[16] 原文「独該報不畏強御，努力主張革命，以是深得人心，銷路大增。」

[17] 劉愛君 (2006) p37

[18] 漢冶萍公司、1908年に大冶鉄山・漢陽鉄廠・萍郷炭坑が合併して成立し、盛宣懐 (1844年-1916年、清末の政治家・実業家) が経営の実権を握っていた。

[19] 日中合併化とは、漢冶萍公司を日中両国が出資し、日中両国が同数で経営陣を構成する会社に改組することである。

[20] 1911年10月10日に清 (中国) の武昌で起きた兵士たちの反乱。辛亥革命の幕開けとなる事件である。

[21] 武昌蜂起後、漢冶萍公司の責任者である盛宣懐は日本にへ亡命し、公司自体は資金不足の問題を直面した。日本政府は鉄鉱石の輸入先として、漢冶萍公司を重視し、日中合弁化を実現するために努力した。

[22] 劉遠錚 (2017) p83

[23] Chan lau kit-ching (1978) p78

[24]「上海總商會與漢冶萍公司，開明公司等，以日本實業界先輩渋沢栄壹男爵此次來華老茶中國實業，今後對於中日兩國實業前途具有非常之希望。特定於初九日午後在愛而近路沙業公所開會歡迎，並煩某舞臺全體藝員演戯，以表歡迎誠意雲。」(時報　1914年5月9日「商界歡迎日本男爵預誌」)
訳文「上海総商会と漢冶萍公司、中国実業会社などは、日本の実業界の先達である渋沢栄一が今回中国を訪問し中国の実業を視察しることは、日中両国の実業の将来にとって希望をもたらす非常に大きな出来事であるとして、九日午後、愛而近通りにある紗業公所で歓迎の会を開き、ある演劇団の俳優全員による演劇を媒介して心からの歓迎の意を表すという。」

[25] 上海『申報』における渋沢関連記事 (『申報』創刊の1878年から渋沢が亡くなられた1931年までの53年間)

年代	報道数	年代	報道数
1878-1909年	7	1922年	5
1909-1913年	11	1924年	8

1914 年	45	1925 年	2
1915 年	13	1926 年	5
1916 年	11	1927 年	8
1917 年	15	1928 年	2
1918 年	12	1929 年	3
1919 年	9	1930 年	3
1920 年	18	1931 年	5
1921 年	13		

[26] 張碧恵（2018）p208

[27]『竜門雑誌』の中には、1914 年 10 月発行のジャパン・マガジーンに掲げられた渋沢の論文「日本及支那の商業的関係」の和訳が載せられた。中には、渋沢は 1913 年 2 月孫文来日した時のことを回顧し、当時孫文に「中国は維新前後日本のように、政治に専念することが多くて、実業への思いは乏しい」、「国富増進の問題に傾注すべき活力を空しく憲法問題の争議に徒費した」と感慨した。

[28]「余即為商家，則自將調査中國經濟狀況，且望得與該國領袖，商家把晤傾談。」『申報』1914 年 5 月 6 日

訳文「私は実業家であるから、おのずと中国の経済状況を調査するし、中国の指導者、実業家と話しもする。」

[29] 龍門社編纂（1944）『渋沢栄一伝記資料』 岩波書店　別巻第一　日記（一） p776 － 789

[30] 北京の歓迎会での講演、武漢の東亜製粉会社での講演など。

[31] 金東（2010）p32

[32]「（渋沢は）アメリカが陝西省の石油資源を占拠したい、フランスが中法銀行を中国の中央銀行に変えたい、英国が長江流域において航運、鉄道等を握っていたことを利権獲得と見なしたが、日本の進出活動がこれらと比べれば全然違い、政治を遠ざけて純然たる経済活動であると考えた。しかしながら、渋沢は確かにそうした考えを抱いていたとしても、事実に基づき考えれば、恐らく二重基準（ダブルスタンダード）を採っているという疑いを持たれても仕方がない。」p31

[33] 劉学照（1989）p143

[34]「1913 年 2 月大蔵次官の勝田主計が自ら「政府は表面上関係せざること但裏面に於ては充分の援助を与ふること」を渋沢に提案した。」 李廷江（2003）p243

[35]「1913 年 10 月 27 日、外務省は総合調査会議を開き、政界には大蔵次官、外務次官、外務政務局長、大蔵理財局長、財界には渋沢栄一、山本条太郎、倉知鉄吉が参加し、中国興業株式会社の株式、改組及び中国銀行の設立について討議した。」 李廷江（2003）p281

[36]『時事新報』1914 年 5 月 27 日北京特電「渋沢大成功」『渋沢栄一伝記資料』 第 32

巻　p558

参考文献

日本語

龍門社編纂（1944）『渋沢栄一伝記資料』 岩波書店　第54巻

臼井勝美（1957）「日本と辛亥革命―その一側面―」 歴史学研究　207

土屋喬雄（1989）『人物叢書―渋沢栄一』吉川弘文館

石井寛治（1972）「成立期日本帝国主義の一断面 -- 資金蓄積と資本輸出」 歴史学研究　383

片桐庸夫（2002）「渋沢栄一と中国―その対中姿勢として（一）」渋沢研究　15

李廷江（2003）『日本財界と近代中国―辛亥革命を中心に―』 御茶の水書房

金東（2010）「渋沢栄一の対中実業思想と利権問題について―1914年の訪中を中心に―」渋沢研究　22

久保田裕次（2012）「漢冶萍公司の日中合弁化と対華二一カ条要求」史学雑誌 121(2)

梁紫蘇（2013）「渋沢栄一の対外観：明治政府への影響を中心に」 東アジア文化交渉研究　6

周見著、西川博史訳（2016）『渋沢栄一と近代中国』現代史料出版

田彤編、于臣訳（2016）『渋沢栄一と中国：一九一四年の中国訪問』不二出版（日本語訳版）

景麗（2018）「日清戦争前後の中国の『申報』からみる天皇のイメージ」北海道大学大学院国際広報メディア・観光学ジャーナル

張碧恵（2018）「「北京政変」前後における「清室宝物」をめぐる議論 ―『順天時報』の社論・論説分析を中心に―」『アジア太平洋討究』30

中国語

劉学照（1989）「清末民初中国人対日観的演変」近代史研究

鄭翔貴（2003）『晩清伝媒視野中的日本』上海古籍出版社

程広媛（2009）「早期『申報』中的日本明治形象略論」理論界

田彤（2013）『1914年渋沢栄一中国行』華中師範大学出版社

劉遠錚（2017）「民国初年中日合弁漢冶萍案的輿論風潮―以『申報』、『時報』為中心的研究」湖北大学学報（哲学社会科学版）44(6)

英語

Chan lau kit-ching　(1978)　Anglo-Chinese diplomacy in the careers of Sir John Jordan and Yuan Shi-kai,1906-1920, Hong Kong:Hong Kong University Press